

道楽の季節が始まった（鈴木幸一氏の経営者ブログ）

2016/3/15 6:30 | 日本経済新聞 電子版

春の到来がどこかに行ってしまったように、先週は寒気が襲って、冬に逆戻りのような冷気に震えていた。3月も半ばである。三寒四温という昔ながらの言葉を思い出したりする。早春のこの時期は、温かくてやわらかな風に和む日が、翌日になると、冷気に覆われて真冬に戻ったりする。夜明け前に起きる習慣の私にとって、その寒暖の差が、余計に指先から敏感に感じるのかも知れない。

熱いコーヒーの入ったマグカップを机に置いて、瞬時、本に読みふけてしまうと、既に冷たくなっていていれなおすことが多い。それは冷気のせいではなくて、コーヒーをいれたことすら忘れるように、日常の行動が、ほとんど無意識のままになされているからかもしれない。たばこをつけても、火をつける一服だけで忘れてしまい、気がつくと、灰皿に棒状のまま灰となっていることが多いのも、同じことである。無意識で行動をしているのは、今に始まったことではなく、子供の頃から変わらない。

■後悔はしないけれど、反省はする

日々、なにかしら、物を忘れる。一日の半分は、家の鍵に始まって財布からオフィスのカードに至るまで、物探しに追われているのだが、治らない。治そうという意志はあるのだが、改まらないのは、意外に物が紛失せず、2、3日もすると、いずくともなく現れるからだ、妙な慰めをしている。1年に数十回もの頻度で海外出張に出かけ、その合間に国内の出張に追われる時期が4、5年続いていたころも、無数に置き忘れたさまざまな物が、あり得ないというほど奇跡的に、後から見つかって、手元に戻ってきたのである。無意識の行動が改まらないのは、忘れ物の多さに比べて、本当に失ってしまう痛みが少ないことにあるのかも知れない。

何事によらず、ひとは痛みを伴わない欠陥については、修正をするとか、心底から改めることをしないようだ。会社の経営についても、似たようなことがあると思うのだが、経営の場合、一つの失敗による痛みが強いだけに、今度は臆病になってしまうことも多いようだ。能天気、楽天家だとか、痛みが身につかないとか、あまりうれしくない言葉で、友人は私を的確に評するのだが、当人は「そうでもないけどなあ」と、思っている。「わが事に関し後悔せず」などと、若い頃、どこかで仕入れた言葉をうそぶいているせいかもしれない。ただし、「後悔はしないけれど、反省はする」といった程度の謙虚さは持ち合わせているつもりである。

この季節になると、私は眠る暇もなく忙しくなる。仕事の量は変わらないのだが、私にとっては、道楽の季節が来て、寝る間もなくなるのである。桜のつぼみが膨らみ始める頃に始まり、上野を妖艶な桜の空間にし、葉桜になるまでのひと月、桜と音楽で春の祝宴をしようという「東京・春・音楽祭」が、今週、16日から始まる。単に音楽を趣味としていただけの私には、精通しているインターネットの世界と違って、音楽祭は、無知なるが故に、諸事万端、なにかと時間を浪費することが多い。その音楽祭も、今年で12年目を迎える。「音楽祭というのは、続けることで、初めてひとびとの共感を得ることができる。始めることよりなにより、当初の思いを大切に、どんな困難な状況にも負けずに、続けることが大切なのだ。今は世界的な音楽祭となっているものでも、聴衆より演奏家の方が多いといった苦しい時期を経験している」。リッカルド・ムーティさんからそんな話を聞いたのは、音楽祭を始めて2年目に、ヴェルディの「レクイエム」を演奏していただいた時である。滞在中、食事を一緒にしたり、長い時間、さまざまな話をすることができて、音楽の深さを教えていただいたのである。

今年の音楽祭は、そのムーティさんが、日本とイタリアの修好条約から150年を記念して、両国の若い演奏家でオーケストラをつくり演奏会を開くという試みが、オープニング・コンサートである。日伊合同の若い演奏家のリハーサルに行き、長い時間にわたる練習に見入る。ムーティさんの指導は、なによりも、ヴェルディの精神を伝えることに始まる。ヴェルディは、その精神というか生命を、音のドラマとして形にしたものだということを、細かいパートを掘り起こしながら若い演奏家に伝えていく。5日間の練習の間に、この若いオーケストラが見違えるような音楽を演奏することができるようになる。そんなうれしい予感が、練習時間の経過とともに確信に変わっていく。これからひと月、仕事が終わる時間になると、音楽祭という道楽に没頭するのである。



鈴木幸一（すずき・こういち）1946年9月生まれ。国内インターネットサービスの草分け。インターネットイニシアティブ（IIJ）を設立し、郵政省（現総務省）との激しいやりとりの末、93年にネット接続サービスを開始。後に続くネット企業に道をひらいた業界の重鎮。酒、タバコ、音楽と読書を愛し、毎春、東京・上野で音楽祭を開催する。近著に「日本インターネット書紀」がある。

■「自粛」の中で音楽祭

「余震は続いていだけれど、あの震災のすぐ後に演奏したベートーベンの第九は、未だに鮮明な記憶となっていますよ。聴衆、演奏家も涙があふれて、ひとつになった演奏は、二度とない経験で、いつまでも鮮明な記憶として蘇る」。去年の夏、ザルツブルグでお目に掛ったズービン・メータさんの言葉である。「自粛」がすべてに優先していた震災後、あえて「悲しみの時こそ、音楽家は演奏をすべきである」と音楽祭を強行した2011年のことを思い起こす。海外の演奏家ばかりか日本の演奏家にも、次々とキャンセルされた時、あえて東京の演奏会に来ていただいたのがメータさんだった。年を取るに従い、ひとの名前をはじめ、日常のさまざまな記憶が怪しげになっていくのだが、鮮烈な記憶が失われることはないようだ。



ムーティさんと日伊合同オーケストラのリハーサル（提供：東京・春・音楽祭実行委員会/撮影：青柳聡）

3月10日、友人が故郷である東北への強い思いから、震災後、3つの音楽ホールをつくる計画をたて、最後に完成した仙台のホールの落成式に行く。ホールの建設にあたり、友人の思いに共感して、若干のお手伝いをしたのだが、落成式に挨拶をするほどの協力はしていなかったわけで、いささか面はゆい思いをしたのだが、「ともかくお願いしますよ」という言葉に、つい受けてしまったのである。

「私は、東北の大震災の折はパリにいて、故郷も横浜で、被災をされた方々の苦しみについては、私の理解を超えています。ただひとつ、震災に襲われて間もない5月の連休に、私の音楽祭と一緒に回してくれている事務局の人間が、音楽祭に出演している日本ではもっとも高いレベルのコーラスグループの方々と、瓦礫に埋もれている道を辿って、被難所となっていた公民館や病院を回っては、明治以来の唱歌を中心にコンサートの巡業をしました。一切のメディアには、報道を禁じていたもので、その活動も知られることはなかったのですが、行く先々で、苦しみの渦中にあった被災者や、演奏してくれたコーラスグループの方々の涙が止まることはなかった。病院では、被災者の方よりも、眠る時間もなく看病や治療に追われていた看護婦さんや医者さんのこみ上げる涙に、歌声が、嗚咽（おえつ）に変わってしまうこともあった。最後に、『松島大漁節』を歌うのだが、あの漁節は地域ごとに歌詞が違っているようで、『それは松島のだ』と、それぞれの地域で違う歌詞を教えてくれ、最後は被災者の方々が、病院や公民館で輪になって踊り出していた。言葉にできないほどの被害にあってもなお、昔から伝わってきた歌を歌い踊る。その生き生きと踊り歌う姿こそ、大小、さまざまな災害にあってもなお、歴史をつくってきた日本の原点というか、エネルギーを感じたものである」――。そんな余計な話を挨拶にしてしまった。もちろん、いくつかのホールをつくってしまった友人の努力には、頭が下がるばかりであるというのが、最後の言葉だったのだが。

人が生きて、年を重ねることは、さまざまな思い出というか記憶がどこかに蓄積することであり、それが一人ひとりの生きている歴史でもある。音楽は音が鳴って消えるまでの束の間のことである。音が消えてしまえば、残るのは音が鳴っていた時間の記憶だけである。だからこそ、音楽という芸術は素晴らしいのだと。12年目を迎えた音楽祭だが、音楽祭が始まってから現在に至るまで、聴いていただいた方々が、少しでもその感動を、記憶としてどこかに潜ませていてくれたら、それほどうれしいことはない。音楽祭の歴史は、演奏会で感動した時の記憶だけなのだから。

鈴木幸一IIJ会長のブログは毎週火曜日に掲載します。

鈴木幸一 IIJ会長のブログでは、読者の皆様からのご意見、ご感想を募集しております。
[こちらの投稿フォーム](#)からご意見をお寄せください。

読者からのコメント

小倉撃門さん、60歳代男性

音楽祭開催を明日に控え、常にも増して袖を高く捲り上げ強く腕を擦られる鈴木さんの姿が浮かんで微笑ましい。ここでご紹介のあったムーティさんを報じた今朝のNHKニュースから得た感想ではミーハー感が否めませんが（哀笑）、鈴木さんの様々な拘りが籠った音楽祭の準備が無事に大詰めを迎え慶ばしい限りです。特に目立たせ過ぎない加工し過ぎない音楽を目指される真摯で慎ましい姿が素晴らしい。イタリア人にもこんなに慎ましいご仁がおられるのだと驚いたのは私の偏見にすぎないが、人は須らく広い視野と深い思考と永い時間軸を備えれば、真の意味で成熟もし謙虚にも慎ましくもなるのだと実感しました。場面は全く違うのですが、東北のあの惨禍後の国会で質問に立った野党自民党の有力議員が被災者への想いに込み上げた嗚咽に噎せておられたが、彼のご仁もそんな広深永な視座と人間本来の豊かな心情を備えておられるのだろう。

60歳代男性

「ムーティさんは、なによりも、ヴェルディの精神を伝えようとしている」というくだりに、日本人がベートーベンやブラームスの絶対音楽を理解できても、イタリアやドイツのオペラを理解するのは難しいというか、できないという話を思いだしました。できないというのは、程度が低いからというのではなく、思想、文化、言語に根差したオペラを理解するには、ネイティブであるか、そうでないなら生半可な知識ではとても補えないという趣旨だったと思います。天覧公演のブラームスの交響曲一番で、あれほどの名演を残す小澤征爾さんも、ウィーン国立歌劇場の音楽監督を務められたときは苦労された様子でした。そんななかで、松島大漁節に生き生きと踊り歌う姿にエネルギーを感じたという一文を読んで、第9の歓喜の歌を心底素晴らしいと思う先に、日本人の心にはやはり松島大漁節のような音楽があるのだなあと分かり、素晴らしいと思いました。

泉野普久さん、60歳代男性

けっして道楽ではなくて良い、そして美しい行いであって、人々を喜ばせる尊い行いだと思います。質の高さやヴォリュームから言っても高い感性や知性とともに変なエネルギーがいて、続けなくてはという気概も素晴らしいです。そしてそこには国境を越えて、また古い友達が仲間としていらっしゃるんですね。見えてもいないし、わかりもしませんでした。ばしょばしょで違う松島の歌は収穫です。あれはダンスもあるんです。みちのくのダンスはまた感動もんです。あと、自分もよくなくし、忘れ、8,9割まさに奇跡的を含めて戻ってくる。不思議ですね、なのかな。この一年でなくして、家の中でなくして戻ってこないものがあります。どこへいったんでしょう。無くなるほうも不思議です。続けてください、よろしくお願いします。

はまやんさん、40歳代男性

上野に花見に行くたびに、鈴木会長が支援されている音楽祭を横目に桜を愛でています。今年もそんな季節になりました。四十の手習いで始めたチェロは、畏れ多くも師匠が東京文化会館で毎年リサイタルするような音楽家だったのですが、福島のご出身で震災後に地元の音楽祭に協力されていました。また、知り合いのバス・バリトン歌手は四国出身にもかかわらず、気仙沼の復興事業に協力して度々東北入りするだけでなく、東京で復興支援リサイタルをしています。かといって震災復興と肩ひじ張るわけでもなく、音楽を楽しむ時間を一緒に積み重ねています。聴きに行くだけでも音楽に参加できるなんて素晴らしいことだと思いながら。